

輜重兵奮闘記

愛知県 山田隆一

昭和十八年四月二日、中部第二部隊へ入隊、四月十六日、満州鞍山で衛生兵の教育を受け、六月十八日海城第一八連隊に転属、輜重兵馬部隊に転入しました。

戦友は、六年兵で班長もおかまいなしの古参二等兵でしたが、私にはよく教えていただきました。野戦作戦にも二、三度参加しました。内務はきびしく、班長の食器取りあい、食べないで飲む一手で、苦勞の毎日でした。五・八輪で駅へ荷物をとりに行くことが多い。ある日、一車両でいったときは零下十四度で、まつ毛も凍り、馬も倒れ、倍の時間をついやしました。

また、落馬し班長はじめ皆に心配を掛けたこともあり、馬でけられごぼう剣が「く」の字になり、曹長に直してもらったこともありました。

十九年一月下旬ごろ、第十八連隊と別れ、錦県極十一

部隊輜重隊に転属、二月上旬、北支作戦に参加、極部隊輜重馬部隊で車両班でした。

作戦中は強行軍で昼夜、雨中を道だか川だかわからなところを行進する。歩兵が歩けず、つれていってこれと頼んでいるが、作戦中手をだすものもない。三日行軍後、渡河中に半数の馬が河中で立ち往生したが、各班負けじと腹まではいって脱出した。

その後さらに五日間の強行軍の上、大休止となった。命令で生水を飲むことを禁止されていたが、田、小川の水を飲んで作戦をしました。

一か月後、赤い夕日をみながらの行軍がつづき、毎日大陸の広さに息をのんだ。見渡すかぎり森林一つなく、部落のあるところに五、六本の木があるのみである。しかも、三、四十キロも遠くにあり、小休止中に馬に飲ます水をくんで帰る途中には、はや部隊は前進して、一所懸命に追いつくことが多い。行進しながら馬に水を飲まし、あと皆で飲みあう。

半月ほど前進したとき、六県の部落のなかより機関銃の射撃を受け、さらに六日後には空より爆撃を受けつつ

行軍する。三十軒の部落があるところでは見渡すかぎりの麦畑でキリギリスの大軍がきて昼も曇り空、土地のものの話では作物の被害を受けるとのことでした。

輜重班には小銃五丁で、私はごぼう剣一丁で、作戦中は心細かった。また二組いた初年兵の一人が自害するほどの作戦でした。

七月ごろ新陵につき、汽車に馬を乗せたのち、病馬廠勤務命令を受けました。病馬廠は三十人で診察治療に励みました。外傷馬が多く、私も軍属と治療の毎日で、五、六日に一頭の馬が死に、七、八人で山に埋めに行きました。新陵は四方が山や河であり、馬洗濯も土地の男女と共にするなど、気持ちのよいところでした。

九月上旬ごろ、毎日爆撃を受け、駅の石炭山に爆弾が落ち、二日かかりの消火の応援をしました。その後、汽車で漢口へいき、船で武昌へ着きただちに第九連隊へ転入、訓練小隊に配属されました。厩は二か所あって支那人も二十五人いる。馬二百頭の訓練部といえども月に二頭は死ぬ場合があり、昼夜の看護は身にこたえる労苦でした。

東方二キロ「隼」の空軍基地があり、敵機の狙撃を受けること再三で、低空三十、五十メートルぐらいなので小銃で五、六発撃つが間にあわない。揚子江に爆弾が落ち水柱があがる。連隊輸送も自動車のガソリンがなくなり、輜重にかわった。部隊長命令により、ただ一人輜重兵出身であった私が指揮者となり、部隊長にも手綱のとりにかたを教えるなど、輸送に努力しました。しかし、再三、ロッキードの銃撃を受け、部隊長は顔を出しません。連隊長と話し合い総指揮官となり、約半年、輸送と兵の安全のためはげめました。

苦力などが家にいくとき、「隼」の基地を通らなければなりません。連隊命令で二人で護衛につとめたこともありますが、五十キロの道は馬でも遠く、帰りは十一時過ぎのときもあり、若いといっても身にこたえました。

終戦前、漢口にB29八十機の大爆撃があり、爆弾の落ちる音はすさまじいもので、三日間燃えつづけ、二日目に応援にゆきましたが、衣服が燃え、手で消すのが精一杯でした。

「隼」飛行場が空襲を受けた数日後南下しました。食糧

の調達では上官も兵も野犬、魚等の調達にはげみ、二か月後、漸く本隊に合流しました。しかしここでも食糧はありませんでした。

当初、同年兵は十二人でしたが、今は私とほか一人しかいません。初年兵が二組と入院者が若干いました。

海上で復員待ちのとき、マラリヤにかかり、四十度以上の熱が出て苦勞しました。復員後も国立病院に二年ほど通いました。博多に上陸、昭和二十一年四月三日帰宅しました。

追 想

愛知県 林 忍

このたび過ぎし日の軍隊当時の思い出を語るにあたり、ありし日の戦友の勇姿や、愛馬への思いが臉に浮かび感慨無量で、いつしか目頭に熱いものを感じ、あいせきの情禁じえなく、人心転々せきりようをおぼえる。

我々は徴兵により国家のかんじょうとして国の安泰を

ちかい、武運長久と存亡をかけて青春のたぎる血潮を戦場で燃焼させ、報国のまことをささげるのいちずであった。

あの日、今日の命は長らえても明日の命を知るものはなく、奮闘連戦連勝、日章旗をかかげた日もあれば、敵の猛攻逆襲にあい九死に一生をえての悪戦苦闘する日もしばしばあった。

師団輜重の輸送がとだえ、りょうまつはけつぼう、弾薬までが底をつき、我が砲兵隊の戦闘機能はそうしつし、砲と運命を共にすると、護身の手榴弾を手にした。明日は奇襲攻撃、「別令があるまで待機せよ」との伝達に身のまわりをととのえ、今か今かと命令を待った。

稜線が白むころ、伝令が飛び込んできた。それは待ちわびた待望の輜重の到着の知らせであった。天のすくいに隊内は生気を取りもどしわきあがった。

昭和十八年の常德作戦につぐ大陸打通を企図する湘桂作戦が火ぶたをきった。

昭和十九年四月二十八日応山を発進した第三師団は、武漢をへて崇陽に集結、軍の左第一線となった。